

子器及び鉛器などが發掘され何れもナポリ博物館にある。外廊の一方には僧侶の宿舍がある。

第四期に屬するものには更にヂユースの殿堂(Templum Jovis Meilichi)と云はれる小殿堂がある。今日は全く壞れてゐるが羅馬の殖民が行はれた最初の頃に建てられた。もと公會所にあつたジュピタの大殿堂が紀元前六十三年に地震の爲めに大破した後三神ジュピタ・ジュノ(Juno)・ミネルヴァ(Minerva)を祭つてゐたものらしく、その土製の像が地下室で發見された。以上建物の四期を知ると共に壁畫の四期を知らなければならぬ。

新著紹介

○日本經濟の最近十年

改造社出版 六年一月十日發行 定價十五圓

全國經濟調査機關聯合會創立十周年の記念事業としてこの四六倍判二千頁の大冊子の出現したことは何といつても慶福すべき事實である、本書項を集むること三十七、いづれも官廳、會社、新聞社等の責任ある報告であつて、農産、林産、

水産、鑛産をはじめ工業界では電氣、造船、蠶絲、紡績、染料、窒素等及び、海運、空運、外國貿易及我國財界の展望等最近十年間の發達をいかにも簡明直截に叙述してある、ことに海外拓殖の進運についても十分の調査報告があることは喜びの限であつて、我等は本書によつて正確にして且豊富なる日本地理及經濟地理上の教授資料を得ることの多大なるを感ぜざるを得ない。片々たる報告でなく、これ遂に集められた調査會の努力に深甚の謝意を表する。(藤田)

○印度漫談

泉芳瑛著 京都人文書院發行 昭和六年一月十五日 定價二圓三十錢

大谷大學教授泉芳瑛氏の印度旅行記の總仕舞である、四六版四〇四頁手頃の本で、裝幀もアジャントに滞在六十日壁畫を描寫した井上畫伯の手になつてゐて氣がきいてゐる、目次動物篇、植物篇、事物篇、風俗篇、神話篇、文學篇、佛蹟篇、史蹟篇といふ八篇と印度からロンドンへの叙事である、地理學者の觀察録ではないが佛教學徒の印度遊歴である丈けに、常人の紀行とはちがつた面白味があるのがうれしいのみでない、行文流暢、直に巻をおく能はざらしむるものがある京都の人文書院はあまりしれてゐない本屋かもしれないが、かうした氣のきいた本をだすところであるを併せて報告しておきたい。(藤田)

○御室の櫻

香山益彦著 大本山仁和寺

著者は御室の舊臣の家に生れて京都府立第二女學校の教諭

である、菊と朝顔やダリヤの栽培を女生の科外に指導して毎年競美會をやるといふ腕きの博物の先生である、このたび寛平法皇一千年御遠忌に際して、其記念としてこの一冊が生れた、洛中での花の名所ことに厚物では天下無双の稱のある御室の櫻を解説し、同時に美はしきコロタイプ寫眞版をつけた。説明は菊版四三頁。圖版二十八。いかにもうるはしい寫眞が出来た折にふれて推奨すべき好著であると思ふ。(藤田)

雜報

○中央アジアの風俗

ヴォルガから東に出て、サマラを過ぐれば既に一望廣漠たるステツプとなる、行けども行けどもステツプ亦沙漠サマラから三晝夜汽車で乗り通して一本も木がない、驛の近くに人工を以て水を撒給したものが生てゐるのみ。自然の低い波狀地には貧弱な草があるばかり、それも六月になると枯れてしまう、土壤は加里を分泌して到る所白くなつてゐる、然しアルイシュ驛をこえると、環境は全く一變し雜草が生えて植物が繁る。カラガチ、白楊、ニセアカシヤ、楓等の街路樹がしげつてステツプとのコントラストのきついのに驚かされる。

カラガチ樹は橙の如く圓く且偉大な成育をとげ大空を壓し其樹の蔭は盛夏と雖も太陽を透さない、其材は堅牢なこと桑と並び稱せらるゝ。

中央アジアといへば、西はカザクスタンから裏海に達する廣漠無限のステツプ地に連り、東は屏立せる高峰連綿を以て支那と境し、最高ハンテングリ、二萬四千尺その西にフェルガナの谿谷地があり、バミールの高原は大小の河原となつてゐる、氣候は平地と山地とによつて相違し盛夏は六月から八月、嚴寒は一、二月、フハラ、ヒザ方面は盛夏攝氏四十度に近づくが冬季には○下三十度に下る、雨は秋より翌年四月までふるが五月から八九月の間は少い。

地震の多いことは我邦に劣らざるものがある。

人情風俗凡そ中央アジア程集團せる多數民族が雜然交錯して居る所は少い、宗教は共通するけれども、その外の言語や習慣の異ひ方がきつい。

土につく民と遊牧民との間の相違が最も目につく、遊牧民はユルタといふ直徑八尺乃至十尺内外の天幕張の小屋に家族同棲す、天幕の上等はフェルト製で一千留にも上るものがある、土地を掘下げて骨組をたてるので嚴寒にも寒さを感じない、水草を逐うて移る時はユルタを車一臺にのせてゆく、この群の中に、コサツク、キルギス、トルコマンの三種がある土につく民はダヂク人及ウスベク人を主とし、トルコマン及キルギスの一部である、ウスベク人は最も早く土着した。フハラ市は彼等の本據で、土城を有し、防壁に住居する様子は支那に類する。

エミール(王)は人民を撫育するよりも、庶民を驅使鞭笞し